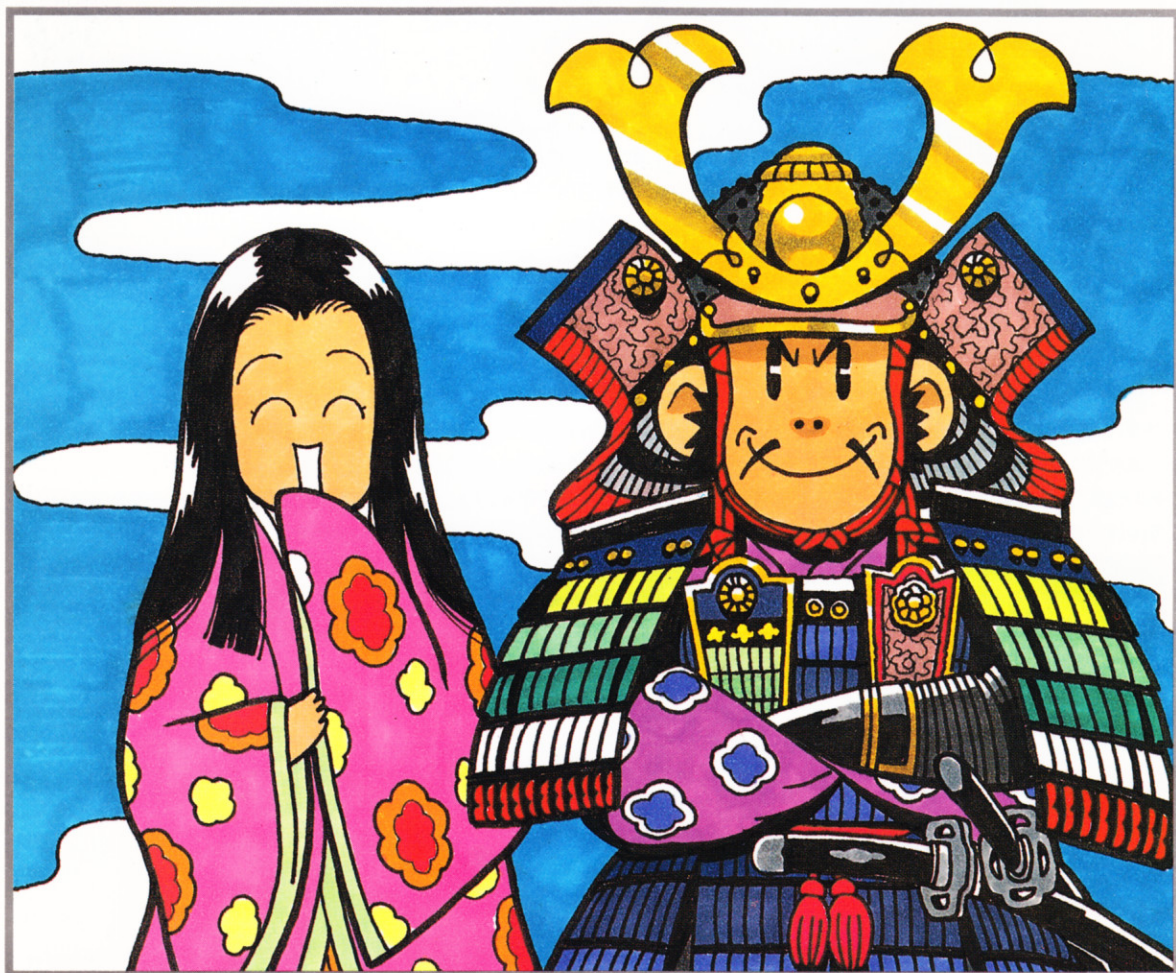


# 太閤立志伝



## 苦労しないで 出世する方法

下巻







# 内政の極意を会得せよ!

## 新田開発



■評定の席では、ほかの武将に先取りされる前に、自ら仕事を確保するのだ!

別に読まなくても『太閤立志伝』は遊べるけど、読みながら遊ぶと100倍はゲームが楽しくなるという上巻に続いて、あわせて読めば1000倍はうれしくなっちゃう下巻の始まりだ。読者のみんな



は「ああ、ログイン買ってよかった」と喜びを噛みしめつつ以下を読んでね。

上巻では、兵糧売却、馬購入、鉄砲購入など、藤吉郎が駆け出しのころに命令される仕事を中心に解説してきたが、この下巻ではガラリと変わって、織田家の天下取りのために、八面六臂の大活躍をする藤吉郎の姿をこらんにいれよう。内政では新田開発、情報収集、城の改修、それから外交、そして城主になってからの心構えを解説するので、ぜひプレーの参考にしてくれ。

それではまず、新田開発の仕事からだ。国が豊かでなければ、とても他国に攻め込んで領土を広げたり、将来日本を治める天下人として、いっばしの教養を身につけることもできない。何を行なうにも、その基盤となる国がしっかりしていることが条件なのだ。では、国を豊かにするとは具体的にどういうことなのか。それは、開墾に次ぐ開墾で米の収穫量を上げることだ。このゲームで金を手に入れるには、兵糧を売るのが一番手っ取り早い。税金の徴収時になれば自然に金



■ほらほら、藤吉郎サン。そんな風に悩んでるふりしないで、さっさと仕事しなさいよ。

は入ってくるが、兵糧を豊富に蓄えてあれば、いつでも好きなときに売って金に替えられるし、合戦のためにも兵糧は大量にあるにこしたことはない。兵糧売却や鉄砲購入などの仕事の次には、新田開発のエキスパートになろう。

評定では、自ら具申して新田開発の仕事を引き受けよう。しかし信長は、藤吉郎が3~4万石収穫を上げたところで喜んではくれない。農民たちを適材適所に配置して、ときには自腹を切っ

## 農民は適材適所に

誰にだって向き不向きがあるように、新田開発を手伝ってくれる農民たちにも、それぞれ得意分野がある

のだ。だから新田開発のときには、整地が得意なヤツには整地を、伐採が得意なヤツには伐採をという、それぞれに適した仕事を振り分けられただけ収穫率はアップするぞ。



## 情報収集

新田開発のお次は、情報収集だ。ログインのシミュレーション関係の記事には、ときどき、「敵を知り、己を知れば百戦して危うからず」とかって書いてあることがあるけど、これはまさに読んで字のごとし。ちなみにこれは中国の古い兵法書、孫子の中の教えのひとつで、敵の情報をつかんで、なおか



■少々危険があっても、敵の城に乗り込んで直接敵の武将から話を聞くことも必要だ。ビビってないで、男ならドーンと行け！

■どういうワケか、このゲームの酒場のネエちゃんは、みんなおしゃべり好き。うまく水を向けて、近隣の大名の情報を聞いちゃえ。

つ自分の勢力を冷静に分析した上で戦えば、何回戦っても絶対に勝てるぞ、というような意味だ。これはゲームでもそのまま通用する。

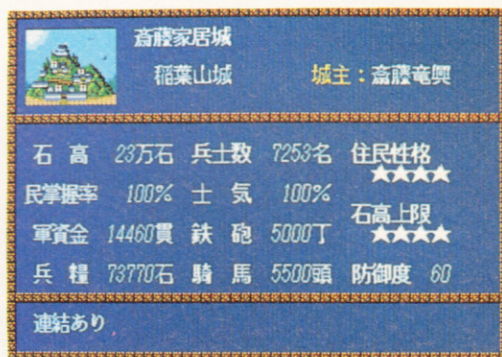
合戦の前には、敵軍には何丁の鉄砲があつて、軍馬がどれだけあるか。また兵数はどれくらいで、兵糧は何万石蓄えてあるかを必ず調べよう。知らずに戦って、敵が圧倒的な兵力を持っていたり、反対に取るに足らない弱小の敵に、何万もの部隊を派遣するのは時間と兵力の無駄だからな。信長公もちゃんとそれは心得ていて、敵と戦うときには必ず配下の者に情報収集の仕事

■情報収集の基本は、まずは敵大名の城の情報をすべて集めることだ。一城たりとも見逃すことなく、調べ抜いてしまえ。



を命令する。新田開発ともども、この仕事もキッチリとこなそう。

情報収集の仕事を引き受けたら、まず対象国の城情報をすべて集めよう。次に少々危険だが、敵の城に乗り込んで敵武将から大名の情報を仕入れる。どこの大名と戦ったばかりだとか、どこの大名とは同盟を結ぶつもりだ、なんて情報が入手できれば、信長公も今後の戦略を立てやすいってもんだらう。時間に余裕があれば、近くの町の酒場に行つて、旅の行商人や薬売りの話を聞くのもいい。ときには、思わぬ情報が手に入ったりするもののだぞ。



## 改修

戦国時代には、加藤清正や藤堂高虎といった築城の名人と呼ばれる武将がいたが、反対に武田信玄のように、城を建てることに熱心じゃなかった武将もいた。合戦に明け暮れる戦国時代には、強固な城を持つことは領土を防衛するという意味で重要だったが、信玄は決して自分の領土内では敵と戦わないように、つまり戦うときには必ず他

国に攻め込んでいたので、築城する必要がなかったのだ。しかしこれはあくまでも理想で、やっぱり守りは固めておくにこしたことはない。

だけど、前田利家を初めとする藤吉郎の多くの同僚が言うように、築城術は知っていれば出世はしやすいけど、それを教わるのはなかなか難しい。オマケにゲーム開始時の藤吉郎の築城技能は、なんと0レベル。こんな状態で改修の仕事を引き受けても、ロクな結果を得られないのがオチだ。改修の仕

事は、できるなら藤吉郎の築城レベルをそこそこ上げてから引き受けたほうがいいみたいだな。

改修の仕事を引き受けると、信長公は1000貫の費用を与えてくれるのだが、もちろん、なるべく安い費用で改修できれば、それだけ信長公も喜ぶ。築城技能のレベルが高ければ、それだけ費用も安くすむし、1回の改修でアップする城の防御度も違う。そこで、築城術を学ぶのに最適な先生を教えよう。それは、足利家が滅ぶと同時に織田家に仕官してくる明智光秀だ。ゆくゆくは敬愛する信長公を殺害する光秀だが、それはまだまだ先の話。今のうちに盗める技術は盗んで、自分のものにしておいて損はないぞ。光秀以外にも築城を教えてくれる武将はいるが、どうせ学ぶなら、その道のエキスパートに教わるほうが安心だ。それに、光秀は築城技能が織田家中でも最高なので、光秀に学べば、1回の授業(?)でかなり築城レベルが上がるのだ。京や堺といった大きな町で手土産を買って、光秀から築城技能を盗み取ろう！



改修に成功しました  
城の防御度が5上昇しました





# やり手外交官、木下藤吉郎!!



◆実績を挙げていれば、何も聴することはない。評定でも堂々と自分の考えを主張しよう。

さて、藤吉郎のゲーム内での内政に関する仕事については、上巻と前ページに詳しく書いた。ここでは、残る外交についてパッチリ解説しよう。

ゲームの藤吉郎が、得意の外交手腕をふるえるようになるのは、まあ、スタートのときに選んだタイプにもよるけど、だいたい墨俣築城も終わって、目付筆頭が奉行になったあたりからだろう。外交といってもいろんな仕事があるが、おそらく藤吉郎が最初に携わることになるのは、調略の仕事。簡単に言うと、他国に赴いて敵武将に利を説いて、寝返らせる仕事だ。この仕事を成功させるためには、調略と弁舌技能に長じていることが条件だ。どちらも、それぞれ漢書と和書がないとレベルアップできないので、お金を貯めて、近畿方面の大きな町で購入しよう。調略は稲葉山の町の竹中半兵衛、弁舌は織田家中の細川藤孝に学ぶといい。

しかしひと口に調略といっても、誰でもいいから織田家と敵対している武将を引き抜いてくればいいというものではない。その時点で、織田家と戦っている大名、それも隣接国や織田領に近い大名の配下を引き抜いたほうが、信長公に喜ばれるのだ。藤吉郎が奉行の地位になるころには、そのターゲットは斎藤家になっているだろう。ここはひとつ、信長公に申し出て、斎藤家の家臣を引き抜いてしまおう。いきなり稲葉、安藤、氏家の美濃三人衆を引き抜いてもいいし、斎藤家の支城である鷺沼城主、大沢正秀を引き抜いて、城をまるごともらってしまってもいい

だろう。ターゲットが大物であればあるほど、信長公の信頼度も上がるぞ。

さて、調略の仕事はこれくらいにして、駆け足でほかの外交の仕事、和睦と脅迫について説明しよう。これらの仕事は、藤吉郎の身分がかなり高くなないと携わることできない。しかしそれだけに、織田家にとっては重要な仕事なのだ。つまり、これらの仕事を成し遂げれば、それだけ信長公の覚えもメデタクなるといいうワケだ。

しかし、ちょっと待ってくれ。脅迫にしろ和睦にしろ、申し込む信長公には絶対の自信があるんだろうけど、相手の大名にとっては、思わず血管がブチッといっちゃうくらい腹立たしいことに違いない。なにしろ脅迫なんて、「我が軍門に下れ!」と言うのと同じだからな。並の努力じゃ相手も受諾してくれないぞ。だけど、そんなときに味方になってくれるのが、その大名家のお姫様だ。どんなにイカツイ顔をしたマッチョの戦国武将でも、花のような愛娘の頼みには弱いはずだ。現代でも、血のつながりもないのに「パパ」と呼ばれちゃうような人たちが、女にねだら



◆外交はとにかく押しの一手だ。正しいのは常に己れただひとり。吉田栄作になりきれ!

れると鼻の下をデレ〜っと伸ばしながら、何でも買ってあげちゃうようにな。男は女の頼みには弱いのだ。この意見ってどこかひねくれてるか?

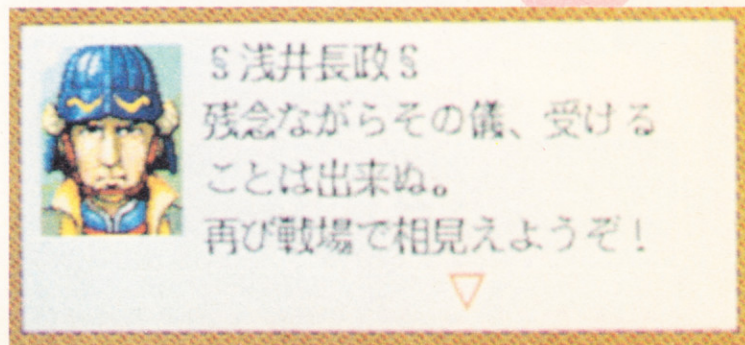
まあそれはいいとして、とにかく脅迫や和睦がうまくいかないときには、お姫様にすがってみよう。しかしこれも築城を学ぶときと同じように、手ぶらじゃダメだ。特に女性はプレゼントに異様に執着するから(まあ、全部の女が、とは言わんが)、ここは堺などで珍しい物を買って、二機嫌を取るのだ。そうして、お姫様とねんごろになって(な〜んかイヤラシイ)、お父様にお口添えを頼むのだ。うまくいけば、相手の大名も態度を変えてくれるぞ。

そのほかにも、外交僧の天海和尚や堺にいる南蛮人宣教師のルイス・フロイスが、外交の手助けをしてくれることがある。ちょっとくらい、外交の仕事がうまくいなくても、あきらめないで、いろいろ手段を考えてみよう。

## 頼みの綱はお姫様



◆藤吉郎の人生はあまりにもツライ、ツライと書き過ぎてしまった気もするが、こうやってお姫様との淡い恋のひとつときもあるんだ。たまには、まあ嫌われちゃうこともあるけどさ。まったく、女って生き物は……(偏見)。



◆これは信長公に命じられて、浅井長政に降伏を促しているところ。徹底抗戦をほざいている。

### 秀吉マメ知識

藤吉郎の天下取りに大きく貢献したといわれる竹中半兵衛は、美濃国の斎藤竜興の家臣であった。信長の美濃国平定後、客分として織田家に迎えられたが、半兵衛の希望で藤吉郎に仕えるようになったといわれている。半兵衛、23歳のことである。





# 徹底解剖! 南蛮町堺を探れ!!

日本各地に数ある町の中で、この堺ほどアツイ町はない! 町を牛耳る今井宗久や、遙かポルトガルから渡ってきた南蛮商人など多彩な人物がいて、見る物、聞く物すべてが新鮮だ! ここはひとつ、堺の魅力をじっくり探ってみようじゃないか!

## 今井宗久



『信長の野望・武將風雲録』では、ひとりで堺の町を牛耳っていた宗久。このゲームでも、心なしか藤吉郎に対して高飛車な態度をとっているような気がする。しかし、その自信は当然だろう。なにしろ、鉄砲から和書、漢書、ひいては茶器や絵画まで一手に商っているんだから。史実でも宗久は堺の会合衆の中心人物だったが、まさに堺の帝王ともいえる豪商なのだ。



五

## 南蛮商人



遙か遠くの異国、ポルトガルから日本にやってきた南蛮商人たち。その勇気とたくましく商魂に思わず敬服してしまう。珍しい南蛮渡来の品物は、新し物好きの信長公に献上すればさぞ喜ばれることだろう。

## セミナリオ



南蛮人宣教師たちの布教活動によって、戦国時代には一気にキリシタンが増えた。その信者たちの協力があるのだろう。ルイス・フロイスは各地の大名情報に精通している。ちなみにセミナリオとは、教会のことだぞ。

## 千宗易

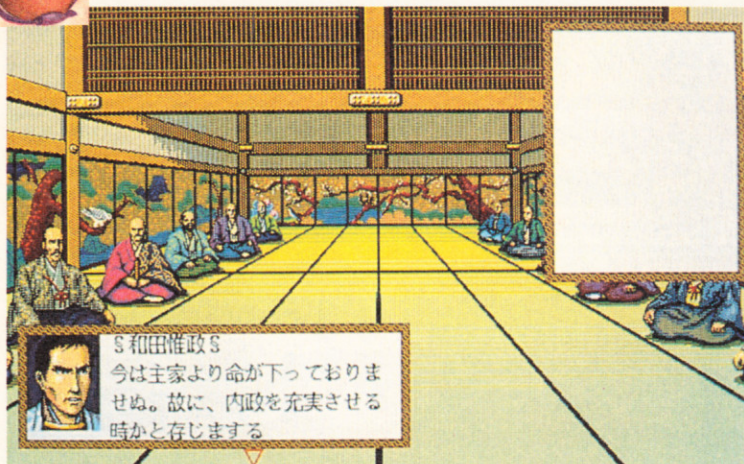


戦国時代を代表する大茶人、千宗易。一流の武将になるために茶道を学ぶのなら、彼に師事することをオスメする。また、彼は高価な茶器をいくつも所有しているので、購入して公卿や信長公への献上物にしよう。





# 城の主、羽柴秀吉誕生!



S 和田雅政 S

今は主家より命が下っておりませぬ。故に、内政を充実させる時かと存じます

■ただの評定の風景じゃないことにはもうお気づきだろう。いつも信長公が座っている場所に、今度は自分が座っているのだ。ズラリ居並ぶ家臣たち……。う〜ん、最高の気分だ!

人間、あきらめちゃダメだ。どんなにクソツレな人生で、途中でガンバルことをやめたくなくても、最後まで貫き通せばきっと実る! それを証明してくれたのがこの木下藤吉郎だ。まだ駆け出しのころ、柴田勝家や滝川一益らに猿だ何だとののしられても、藤吉郎はくじけることなく、胸に成り上がりの野望を秘めてじっと耐えてきた。烈火のごとき信長公にどんな無理難題を申し付けられても、藤吉郎は投げ出すことなく、必ず成し遂げてきた。それも信長公が期待した以上の成果を上げて! その藤吉郎に、ついに「成り上がる」ときがやってきたのだ!

今まで、上巻やこの下巻のこれまでのページで書いてきたことを実行していれば、藤吉郎もそろそろ織田家中で一目も二目も置かれる立場になっていることだろう。身分で言うなら、中老、もしかすると、家老にまでなっている

## 人材確保



■选材を集めることは、優れた城主になるための条件だ。各地に人材登用の使者を送れ!

かもしれない。これまでの課程で、織田家の重鎮であった林秀貞や、親切な上司であった丹羽長秀、そして将来、戦国史上最悪の大罪を犯す明智光秀らは、織田領のどこかの城主に任命されているはずだ。しかし、彼らに引け目を感じる必要はないぞ。藤吉郎も家老まで出世していれば、城主になるのも時間の問題なのだから。

そのときの織田家中の情勢によって、どこかの城に配置されるかは変わるが、だいたい史実にそって長浜城あたりの城主に任命されるはずだ。そうなったら、これまで苦勞をしてきたワケだから、とりあえず大喜びしていい。だが、いつまでも浮かれていてはダメだ。一城の主人となったからには、これまでのように誰かに命令されて動くのではなく、近隣諸国の動静を見ながら、自分自身でいかに織田家を大きくしていくかを考えなければならぬのだ。もうこれからは、足軽上がりの木下藤吉郎でなく、織田家の重臣、羽柴秀吉になったのだからな。

城主になれば、秀吉ひとりでは成し遂げられない問題も出てくるだろう。そんなとき、秀吉の片腕となってサポートしてくれる有能な家臣が必要なのだ。

もちろん、信長公は秀吉に城を任せる際、家中の者を配下の武将として連れていくことを許してくれる。しかしそれは秀吉よりも身分が低い武将に限られているし、優秀なヤツはとくにどこかの城主になっているはずだ。そこで、城主になったら全国各地にいる優秀な人材を発掘することが急務なのだ。右ページに、我がログイン編集部が、「こいつあ、使えるぜ!」と思った浪人のリストを載せておいたので、人材探索の際にはぜひ活用してほしい。

そうして家臣団が充実してきたら、今度は自分の領内を豊かにしよう。新田開発をして、とにかく米の取れ高を上げるのだ。屈強な兵士も、食料がなくては何もできない。まさに、腹が減っては戦はできぬのだ! とはいえ、昔のなごりで、自ら新田開発なんかしちゃダメだぞ。評定で内政に向けた家臣に命じて、彼らに働いてもらうのだ。秀吉には、もっとやらねばならんことがたくさんあるんだからな。

国を豊かにするには、もちろん軍事力も充実していなければならない。軍馬や鉄砲の購入にも気を配ろう。城主になってしばらく時間がたてば、信長公から、「どここの城を攻めよ!」と命令が来る。そんなとき、配下の兵が弱くては何の役にも立たないぞ。

というように、城主になったからには、何事もオールラウンドに考えなければダメなのだ。まあ、たまには愛妻のねねとナニして休養するのもいいが、やりすぎは体に毒だぞ! (意味不明)

## 富国強兵



■配下の家臣は、武力、内政の偏りなく、バランスよく考えながら集めるべし。それが富国強兵実現の第一歩だ。

## 秀吉マメ知識

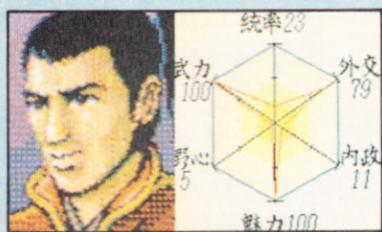
ゲーム中に藤吉郎の親友として登場する前田利家は、事実藤吉郎とじっこの間柄だった。とはいえ、実際は織田家の美濃国平定後で、岐阜城下で屋敷が隣合ったことから家族ぐるみの付き合いが始まったという。利家の娘が藤吉郎の養女になっている。



# 日本全国浪人者リスト

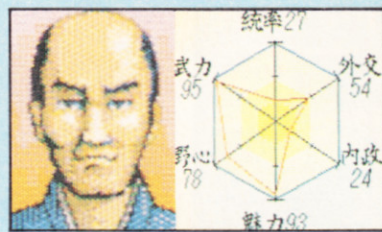
史実、ゲームの世界を問わず、織田家の家臣団は戦国時代を通じて抜きん出て優秀な家臣団だ。それだけに、ゲームでは信長公は在野の人物を登用することに消極的なのだ。しかし城主となったからには、そんなことに構う必要はない。家臣たちを全国に派遣して、各地の隠れた逸材を配下に集めるのだ。以下に、できる！と思った浪人たちをピックアップしてみたので、城を任されたらさっそく彼らを家臣に登用すべし！

## 前田慶次 ..... 新発田



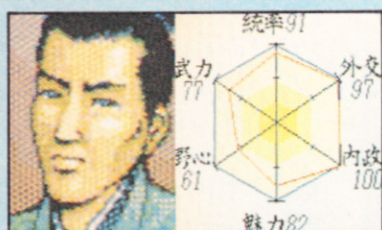
破天荒な人物の多かった戦国時代でも、群を抜いて奇行の多かった人物。だか合戦の腕前は超一流だ。配下にして羽柴軍の先鋒となつてもらう。

## 伊東一刀斎 ..... 小田原



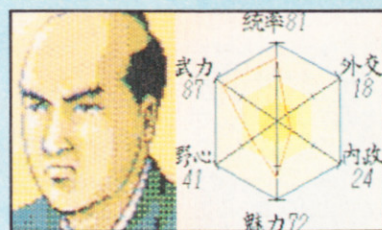
いくつもの伝説を生み出した謎多き剣豪。のちに歴代徳川将軍の必修武芸となる、一刀流の創始者だ。彼に学べば、武力もかなり上がるだろう。

## 竹中半兵衛 ..... 稲葉山



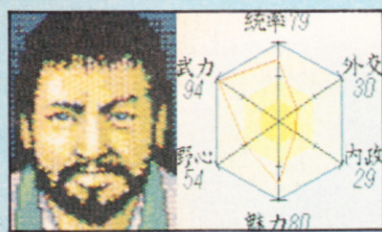
いわずと知れた戦国時代随一の天才軍師だ。彼を配下に加えるには少々苦労するが、この能力からすれば、それくらいの手間は屁でもないぞ！

## 前野長康 ..... 稲葉山



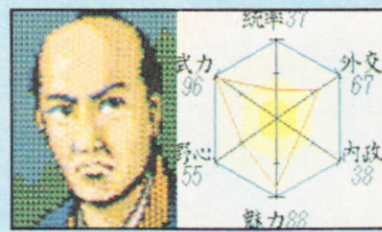
蜂須賀小六と義兄弟の契りを結んだ人物。小六ともども、秀吉の墨俣築城に貢献した。小田原、四国征伐や朝鮮侵略などで数多くの戦功を立てた。

## 百地丹波 ..... 大和



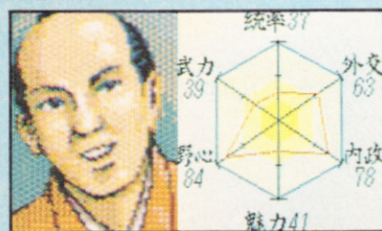
伊賀忍軍を束ねる頭領。史実では、信長は彼ら伊賀忍者の能力を恐るあまり、彼らを根絶やしにしようとしたのだ。その実力、推して知るべし。

## 柳生宗厳 ..... 大和



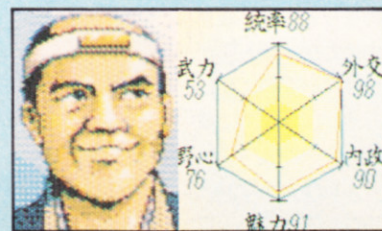
剣は人を殺すためにあるのではなく、活かすためにある、と唱えた柳生新陰流の創始者。器量も並々ならぬものがあり、茶道にも秀でている。

## 楠 正虎 ..... 京



武芸に秀でた家臣だけ集めても、熾烈な戦国の世は渡っていくけない。その穴を埋めてくれるのがこの人物だ。人材登用などに力を発揮するぞ。

## 黒田官兵衛 ..... 倉敷



ちょうど三國志で言うところの伏竜、鳳雛のように、竹中半兵衛とともに秀吉の両兵衛と並び賞された武将だ。調略、築城のエキスパートだ。

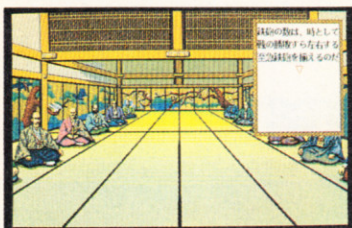


# 私本太閤記

## 藤吉郎、天下人への道・後編

### 第五章

### 藤吉郎の台頭の巻



■以前は周囲にバカにされていた藤吉郎も、今では評定でも堂々と発言できる。

藤吉郎の活躍をリプレー形式でお伝えするログイン版『私本太閤記』。前回は、藤吉郎が蜂須賀正勝の協力を得て、墨俣城を見事完成させたところで終わった。もちろん読者のみなさんも覚えてるよな。その後も、新田開発や改修。あるいは調略などの外交面でも手柄を立てた藤吉郎は、ついに奉行を経て中老にまでなったのだ。いままでの藤吉郎の努力を、信長公はちゃ〜んと認めてくれたってことだな。しかもそれだけでなく、信長公は林秀貞や丹羽長秀らと同じく、藤吉郎にも城を与えてくれるというのだ！ いやあ、さすがの藤吉郎も感動のあまり涙を……。と思いきや、信長公はいきなりこんなことを言ったのだ。

「藤吉郎、おまえにうってつけの城は見つかったのだから、お前は城主になるにはちと教養が足りんようじゃ」

いきなり肩すかしをくってしまったが、これは信長公の言うとおり。城を任せられ、織田家の中枢となった人間が満足な教養も身につけていないようじゃ、藤吉郎自身はおろか、ひいては織田家全体のイメージダウンにもつながってしまう。そう考えた藤吉郎は、さっそく京へ上って当代一流の絵師、狩野永徳に弟子入りすることにしたのだ。

茶道や芸術などの文化面の技能は、鉄砲や騎馬技能のように店で下働きをしても上昇するものではない。ちゃんと教授料を払って学ばなければならないのだ。しかし、この教授料がけっこう高く、どちらも最大レベルまで身につけるとしたら、最低でも400貫近いお金がかかってしまうのだ。いかに奉行や中老になろうとも、こんな大金はそうたやすくは払えない。仕事もこなせるようになって余裕が出てきたら、少しずつでもお金を貯めておいたほうがいいな。それと同時に、もっと効率よく財テクにも励んでおくといひぞ。

近畿の大きな町では、絵画や茶器などを売っているが、これらを思いき



■師事しても、必ずその技能が上昇するというワケではない。何度でもチャレンジせよ。



■藤吉郎とはあまり相性のよくないような光秀だが、唐物肩衝をエサにすれば……。

て買って堺の南蛮商人の所に持っていくのだ。日本の美術品に興味のある彼らは、なんとこれらを通常の2倍の価格で買ってくれるのだ。やりすぎると、日本の美術品を海外に流出させてみたいといい気分がしないけど、ほどほどならいい小遣い稼ぎになるぞ。

我が藤吉郎は、この過程で幸運にも日本にふたつとない名物茶器、唐物肩衝を手に入れることができた。これはもしや、と思った藤吉郎は、さっそく明智光秀の所へ行ってみた。案の定、これまでたいいの土土産では納得しなかった光秀が、すんなりと築城術を教えてくれたのだ。これで築城レベルもMAXだ。これなら、一城の主となっても何も恥ずかしくはないぞ。

一口  
コラム

## 織田、徳川の先陣争い



中央進出を狙う信長は、行く手に立ちはだかる浅井・朝倉連合軍を滅ぼすことを決意し、盟友、徳川家康とともに姉川の戦いに臨んだ。ちなみに、この戦いを記した史書には、戦いの先陣を切ったのが、織田軍となっているものと徳川軍となっているものがある。信長としては、いかに盟友とはいえ、家康という他人の助けて戦いに勝ったことを後世に残すのがいやだったのだろう。逆に家康としては、自分たちの力で信長を勝たせてやったという気持ちがある。そのため、織田びいきの書物と徳川びいきの書物で、活躍した先陣の記述が違っているのだ。



## 第六章 金ヶ崎の悪夢の巻



■藤吉郎軍はせいぜい1500。対する敵は総勢にすると2万を越える。どうする藤吉郎？

城主にふさわしい技能も身につけ、藤吉郎は喜び勇んで京から清洲城への道を急いでいた。と、そのとき、信長公から使いの忍者がやってきた。

「軍評定が始まります、急ぎ居城のほうまでお戻りください！」

長年の苦勞の末、宿敵の斎藤家も下した今、いったい何が起こったというのだろうか？ 藤吉郎は一抹の不安を感じながらも、清洲城へと急行した。



■あわてふためく織田家臣団。勇猛をもって知られる勝家も、いつになく緊張している。

評定には、もとは斎藤竜興配下の猛将で、美濃三人衆と呼ばれた稲葉一鉄、氏家ト全、安藤守就らの重臣や、柴田勝家らの武功派が緊張した面持ちで列席していた。遅れて評定の場にはやってきた藤吉郎は、周囲のただならぬ雰囲気これから信長公の口から発せられる話の内容が、いかに重大なものであるかを感じ取った。

「宿敵斎藤竜興を倒した今、我が織田家は朝倉を攻め滅ぼす！」

予想もしなかった信長公の言葉に、一同は一瞬息を飲んだ。なぜなら、朝倉を攻めること自体は大したことではないが、その同盟国の浅井家をも戦いに巻き込むことは、織田家にとって恐るべき脅威となるからだ。浅井家は精強を持って知られる上に、朝倉とは固い絆で結ばれている。いかに信長と義兄弟とはいえ、恩義に厚い当主長政は、織田家が朝倉を攻めればきっと軍を起こすことは間違いない。

しかし信長公の決意は固かった。家臣たちの反対意見を一蹴すると、さっさと城を出発してしまった。あわてて戦支度をして後を追う一同。こうして浅井・朝倉連合軍との熾烈な争いの幕は切って落とされたのだった。

2万近い大兵力を率いて朝倉領の金ヶ崎城に迫った信長軍だったが、その途中、浅井家は何の手出しもしてこなかった。勢いを得た信長軍は、そのま



■殿軍を買って出る藤吉郎。そうだ、藤吉郎が活躍するのは内政のときだけじゃないのだ。

ま金ヶ崎城に総攻撃を仕掛けようとした。しかしそのとき、早馬が、浅井長政が兵を率いて小谷城を出発したことを知らせてきた。信長軍は完全に退路を断たれたのだ！ こうなってはグズグズしてはいられない。信長軍は一斉に陣を引き払って全军撤退を始めた。だが、藤吉郎だけは、逆に自ら信長公に殿軍を申し出たのだ。驚く信長公。浅井軍きたるの報を受けた朝倉軍が、信長軍の背後を衝こうと城から出てくることは間違いない。誰かが、朝倉軍を足止めせねばならないのだ。

こうなったら覚悟を決めて、いかに浅井・朝倉軍をしのぐかを考えなければならない。敵軍と隣接して合戦になってしまったら、とにかく策略に次ぐ策略で敵の士気を下げまわろう。もちろん、敵に兵力の少ない部隊がいたら、集中攻撃で叩き潰すべし。ただし、深追いは禁物だ。兵士数では圧倒的に不利なんだし、目的は相手に勝つことではなく、無事に逃げることなのだから。チャンスがあったら頃合を見計って、さっさと撤退してしまおう。帰りのルートは、思いきって大きく迂回して京都方面から清洲城に帰れば、敵と接することはまずないだろう。

九

## この大兵力に勝ち目はない!!



■一見広いように見える戦場だが、いざ戦ってみると、実際にはかなり狭く感じられる。

まだ死ぬワケにはいかん



秀吉マメ知識

城持ちになったからといって、慢心してジッとあはしている藤吉郎ではない。調略の天才である藤吉郎は、浅井家の重臣を次々と味方に引き入れていったのだ。姉川の戦いから3年で浅井家が滅んだのは、多分に藤吉郎の調略戦のおかげである。



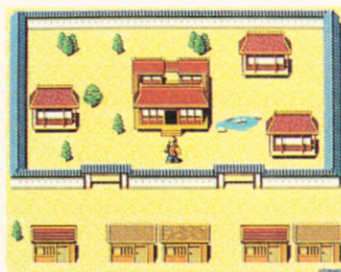
## 第七章 実れ! 朝廷工作の巻

金ヶ崎のいざこざで、城主昇任はお流れになってしまったが、そんなことでスネる藤吉郎ではない。そのかわりに、信長公の絶大なる信頼を得たのだから。めったに他人をホメない信長公が、直々に藤吉郎を呼んで、「これからもわしの力となってくれい」なんて言ってくれたのだ。これ以上の荣誉があるだろうか。何物にも代え難い褒美をもらって、藤吉郎はなおも一層、織田家のために働く活力を得たのだった。

それからしばらくたった評定の席で、藤吉郎は次なる大任を仰せつかった。朝廷に働きかけて、官職をいただくというのだ。姉川の戦いで浅井・朝倉連合軍を破った織田家には、十分にその資格があるといえるだろう。思えば、藤吉郎が駆け出しのころには、この朝廷工作という仕事は林秀貞や丹羽長秀といった、織田家の重臣たちだけが携われる仕事だった。それを、今では藤吉郎が行なえるようになったのだ。難しい仕事ではあるが、それだけ藤吉郎の家中での重みが増した証拠でもある。これはなんとしてでも、成し遂げなければならないだろう。

というわけで、朝廷工作の任についた藤吉郎は、さっそく京に上って御所を訪ねてみた。しかし、そこではあっけなく門前払いをくってしまったのだ。「いまや、織田家の重臣となったわたしを門前払いとは……」

なんて不平は藤吉郎は言わない。直接御所に入れてもらえないのなら、朝廷に対して発言権を持っている公家を動かせばいいのだ。京には3人の公家



■これに見えるは天皇のおわす御所だ。これからここで、殿のために官位を授かるのだ。

官位修得も  
骨が折れてのう



がいるが、藤吉郎はその中の、山科言継卿の屋敷を訪ねてみた。

山科卿は、雲上眉なんか書きちゃってひと目見てすぐに気位が高そうだな、とわかるお公家さんだ。しかしさすがに狩野永徳や堺の千宗易のもとで修行を積んだ甲斐があつて、目通りが許された。とはいえそこはお公家さん。ひと筋縄ではいかないようだ。山科卿は、「朝廷に口をきいてやってもよいが、磨の好きな土産を持ってきてくれ」なんておっしゃる。このゲームの登場人物は、なんでこんなに土産が好きなのかな、などとグチはこぼさず、藤吉郎はさっそく以前購入した

太刀を献上した。それもただの太刀ではなく、名匠の鍛えた業物だ。しかし山科卿は喜ぶどころか、「磨はホントは茶器が好きなのじゃ」などとワガママを言う。こうなったら、とことんつきあつてやるわい!

藤吉郎は茶人、山上宗二を訪ねて、ありったけの茶器を買った。これだけの土産をそろえれば、いかに公家といえども文句はあるまい!

藤吉郎のお土産作戦は成功して、山科卿はどうやら朝廷に働きかけてくれたようだ。以前は入れなかった御所にも入れて、そして……。

「織田信長には、筑前守を授ける!」

御簾の向こうから澄んだ声が響いた。一瞬我が耳を疑ってしまったが、ついに成功した。朝廷工作が成功したのだ。

藤吉郎は、見事朝廷工作の任を果たし、信長公は筑前守の官職を得たのだ。

### 獲得、筑前守!



■予想以上に山科卿の力は大きかった。正親町天皇が、自ら藤吉郎に筑前守の官職を!!

一口  
コラム

## 官職名ってなに?



官職とは、ひと言でいえば、現在で言うところの各都道府県の知事のようなものことで、律令制度の確立した鎌倉時代から使われ始めたという。このころには、実際にその土地を治めている武将に対して、朝廷から正式な手続きののち、授けられていた。つまり鎌倉時代には、たとえば三河守なら、本当に三河を治めている武将に対してだけ名乗ることが許されていたのだ。しかし室町時代になって天下が乱れてくると、次第にこのルールも守られなくなっていって。そうして武将たちは自分にハクをつけるために、勝手に官職を名乗るようになったのだ。



## 最終章

### 誕生! 亀山城主 羽柴秀吉の巻



◆金ヶ崎のときと違って、今度は信長軍の圧勝だ。これで將領も晴らせたってまんざら。

藤吉郎の働きによって、信長公は朝廷から筑前守に任じられた。それを報告したときは、信長公は、「別にうれしくもないが、せっかくだからもらっておこう」とかなんとか言っていた。まあ、信長公の気性だから、口ではそんなことを言っている、心の中ではちゃんと藤吉郎の働きを喜んでくれているに違いない。このころになると、藤吉郎もただ信長公を恐れるだけでなく、その胸中までもわかるようになってきたのだ。それだけ信長公との間に、深い信頼関係ができたことの証拠だろう。

しかし信長公は、朝廷から官職をもらったからといって、うかれるようなお人ではない。喜びも束の間、金ヶ崎で散々な目にあわせてくれた浅井・朝倉連合軍に、しっかりお返しをするというのだ。もちろんまた例によって、評定の席では家臣には有無を言わず、「これは軍議の席ではあるが、今回はみなわしに従ってもらう。我々はこれより浅井を討伐する!」などと言っている。柴田勝家や稲葉一鉄といった重臣たちは、「殿! そうなると今度は、朝倉が黙ってはいませんぞ!」と一応反論はしたが、信長公に一蹴されてしまった。信長公は、このときのために盟友、徳川家康に援軍を頼んだという。徳川軍に朝倉軍を任せて、我々は浅井家だけを引き受けようというのだ。さすがは信長公。常に一手も二手も先を読んで戦略を立てておられる。こうなったら、徳川軍にバカにされないよう、我々も戦場を駆け巡って目いっぱい手柄を立てまくぞ!

◆いよいよ城主に任命される藤吉郎。これを機に、名前も重々しく改名だ!

な〜んで意気込む必要すらないほど、浅井軍は弱かった。織田軍はあつけないくらい簡単に、浅井軍を倒してしまったのだ。しかしこれも、それだけ織田家が強大になった証しなのだ。そしてその陰には、藤吉郎の長年の苦労があったのだ。まあ、昔だったらこんなエラそうなことは言えなかっただろうけどな。今じゃ、藤吉郎も織田家の重臣中の重臣だし……。そういえば城主昇任の件はどうなっただろうか。藤吉郎がそんなことを考え始めていた矢先、信長公からお呼びがかかった。「そちを城主にする件じゃが、お主には伊勢の亀山城を任せようと思う」つ、ついに城主に!? もちろん、呼ばれたときから昇任の件だとはわかっていたが、まさか伊勢亀山城のような大きな城を任せられるとは。信長公の深い愛情に、藤吉郎は思わず涙した。「お前も城主となったのだから、いつまでも木下藤吉郎では格好がつくまい。何かよい名に改名してはどうか」「ははっ。それでは僭越ながら、織田



家の重臣中の重臣であられる、柴田勝家様と丹羽長秀様の二両者より一字ずついただき、今日より羽柴秀吉と名乗りたいく存じます!」

「うむ! よい名じゃ。伊勢亀山城主、羽柴秀吉よ。これからわしの片腕となって織田家を盛り立ててくれい!」

桶狭間の戦い以来、陰に日向に織田家のために尽くしてきた藤吉郎は、ついにこの日をもって一城の主となり、羽柴秀吉となった。もちろん、城主になったからにはこれまで以上の苦難が待ち受けていることだろう。しかしこれ以後の秀吉の人生は、読者のみんなに託すことにする。秀吉の人生のゴールは城主になることではない。天下人となって日本を治めるその日まで、秀吉のあくなきチャレンジは続くのだ! そしてその夢が叶ったとき、読者ひとりひとりの『太閤記』が完結するのだ!

## 晴れて一国一城の主に!!





太閤

立志伝



苦勞しないで出世する方法

LOGIN 7号特別付録

平成4年4月3日発行(毎月2回第1、第3金曜日発行)第11巻 第7号 通巻146号

Printed in Japan